

インドは剣を捨て不殺生の教えを天下に示せ

— インド国サルボダヤ大会出席のさいのラジオ放送原稿 —

昭和三十七（一九六二）年十一月二十三日 インド国

南無妙法蓮華經

私は*バブジーの論文の中について、『剣の教義』と題する論文に、もつとも感激いたしました。この論文により、インドとガンディーに対する深い信仰を、私は持つことができました。今、その論文の一節を読みますと、

「私の信仰は地理的に制限されない。もし、私の信仰が真理に生きるものであれば、それは、インド自身に対する私の愛情も超越するものである」
と言われております。これによつて、インドに国籍なき私が、インドのために『剣の教義』を提案することを許していただきたい。

— 20 —

弱いから非暴力の行動を採用するのではない

「私は、インドが弱いから、非暴力の行動を採用せよ、というものではない。私はインドに、自身の能力を自覚して、非暴力を実行してもらいたい。インドの力を認識するには、なにも武器による訓練は必要としない。われわれに、その必要があるように思われる者は、われわれ自らが、自分たちを一つの肉の塊であると思つてゐるからである。私はインドに亡ぶることのなき魂を、かつまた、あらゆる弱さを超えて、全世界の結束に挑み、勝利を得ることができるところの、強い魂を持つておるということを認識してもらいたい」（『剣の教義』より）。

— 21 —

インドの独立自由の政治的大革命には、武器の訓練は必要でないと、ガンディー翁は断然、拒絶しておられます。

武器の訓練が、必要であるかのこと考へるのは、自己の精神力の優越を信ずることができますに、印度もまた、ただ一個の肉団にすぎないと間違ひから、臆病になつたのにすぎません。

印度は全世界の暴力の結束に挑戦して、いかなる武器に対しても止ぼされない、

決して必ず勝つといつ、その強さを持つ、わが魂を持つておるということを認めよ、と勧告されております。

ガンディー翁が逝いて、^{*}奥津城いまだ乾かざるに、自己のもてる精神力の強さを打ち捨てて、かの動物的な、しかも、残忍なる武器を採用せんとするのは、一体どうした間違いありますか。

ガンディーの戦争の勝利の拒絶

「崇高なる精神の持ち主は、国民的屈辱を、もはや耐えることはできないと言つて、その憤りの思いを、暴力によつて表現せんとするものである。私の知る限りにおいて、彼らは自己を破滅し、ついには自国を、その苦しみ、罪悪の中から、救い出すこと能わざして、かえつて、自己の国を滅ぼしてしまつにちがいない」(『剣の教義』より)。

新疆独立のインド国民は、^{*}中共と国境線の問題に、紛争を生じ、中共の横暴を憤慨して、国民的屈辱なりとし、わが忍耐もその限度を超えたと言つて、ついに武力を行使して、中共の横暴を排除せんと決定されました。

- 22 -

いやしくも、武力を採用したならば、必ず勝つといつ信念に万一、誤算があり、あるいは、手違いがあつては大変な不幸となります。しかも、武力を採用することによつて、国境紛争は、そう簡単に解決する所以はありません。武力採用によつて、国境紛争の問題も、道徳的、精神的地位において、^{*}理非曲直を論ぜられるべきものが、たちまち一変して、暴力的勝敗といつ動物的次元に落ちてしまつました。たゞ戦争において暴力的に勝利を得たとしても、それは平和国家のインドに、なんの面目も施しません。万一千にも、戦争の結果に勝利を得ることができなかつたならば、^{*}ただに、平和国家のインドの不名誉になるに止まらず、人命の死傷、財産の破壊、国土の荒廃など、あげて數うべからず、物質的、精神的画面に甚大の損害を蒙らねばなりません。こうして、最初の国境紛争の問題さえも、かえつて不利に解決されること必定であります。

私たち日本国民は、かの第二次世界大戦の終結において、この戦争の罪悪とを、あくまで体験したものであります。

「もしインドが『剣の教義』を採用するならば、必ず一時的な勝利を得るかもしれないが、その時には、インドは私の誇りを失うであろう」。

- 23 -

かくのごとくガンディーは、戦争の勝利さえも、断然、インドにおいて拒絶されました。

「剣は精神力に必らず負ける」

かのフランス皇帝ナポレオンが軍に勝った絶頂期においてさえも、「剣は精神力に必らず負けるものであろう」と思議し、かつ説明しながらも、しかも断然、自ら剣を捨てることができなかつたのは、彼を取り巻く周辺の皇帝、王者たちが、彼を戦争に駆り立てて、ナポレオンの思うままに、させておかなかつたらだと言います。

- 24 -

インドの今度の戦争行動も、インドの指導者たちの本意でなかつたことは、私は固く信じます。それは、本年六月に開催された核兵器反対集会の宣言、決議によって明瞭であります。その後、幾月ならざるに、インドが国をあげて『剣の教義』を採用せしことは、いつに、インド独立の慈父マハトマ・ガンディー翁の失望が、いかに大きいものであるかは、想像するに余りあります。

「インドは宗教の根本義たる不殺生・非暴力の信念を世界人類に示すべし」

「インドは世界に向かつて、一つの崇高なる使命を有することを中心から信ずる。インドはヨーロッパを盲目的にまねるはずはない」(『剣の教義』より)。

世界は人類あつてより來、いまだかつてなき、一大戦争体制の砲と化してしまいました。いかに個人が、戦争を好みなくとも、だれ一人として戦争体制から逃れ出る道はありません。まさに佛陀の予言されし、闘争堅固の時代であります。

- 25 -

この戦争体制から脱出する道は、歐米諸国の物質的な経済政策や、主義・主張にあるのではなくして、東洋の精神的、宗教の信仰に待つよりほかに、なんの方法もありません。バブジーの生涯は、インド民族の中に生まれし、宗教の根本義と、彼が信じた不殺生・非暴力の教えをもつて、インド独立を遂行せられました。これこそ、軍備競争、核兵器戦争の悲劇から、人類を救い出す、ただ一つの大乗開闢であります。

インドの使命は、針の先ほどの国境線の問題ではありません。全世界の破滅を救う大使命を持ております。この使命を、世界に向かつて果たさんためには、インドはインドに生まれし、宗教の根本義たる不殺生・非暴力の信念を、まず万国の平和を求める

人々に、植えつけねばなりません。それは、いかなる屈辱にも耐えて兵器、殺人器を放棄することあります。

闘争堅固の罪悪の時代に、戦争を放棄することは、いずれの国に向かつても要求せられません。ただひとり、インドの国のみが、この要求に応える国家であり、民族であります。『剣の教義』に災いせられ、苦悩に懨き悲しむところの世界人類のために、今こそインドは断然、剣を捨てて、信仰の根本義を天下に示さねばなりません。

インドの戦争の拡大は全世界人類滅亡の導火線

— 26 —

バブジーの『精神対剣』の中に、ナポレオンが、戦場からオーストリア皇帝に送った手紙の中に、「戦争によつて、何千といふフランス、オーストリア人が殺されました。このような悲惨なことが、なおも続くという見通しが、私を深く苦しめますので、ここに皇帝に訴えます。歎きの最中に、かつまた一万五千の屍骸に囲まれて、陛下よ、私は皇帝に是非、緊急に警告せねばなりません。皇帝は戦場より、遙かに隔たつた地におられますので、私の心の深い苦しみを、お持ちになることはできないであります。」

皇帝よ、われわれの世代を、どうか平和と静寂に帰そうではありますか。もし、後の世の人々が戦争を始めるほど愚かであれば、幾年かの戦争の後からは、平和を受諾して、相互に生きるであります。

インドは闘争堅固の悪世においても、宗教の根本義たる不殺生・非暴力の恩恵を蒙つて、これまで罪悪の集積にして、悲惨の根源である現代戦争の禍を、体験することなくしてすごされました。

しかるに今度、国境線の紛争に、『剣の教義』を採用せしたことによつて、すでに一千五百、一千五百の戦死者を出しました。非暴力の信念厚きインド民族の青年が、何の罪なくして、ついに帰らぬ人となりました。国境線はまたインドに返りましょう。しかし、この戦死者の魂は永遠に帰らぬ所へ行きました。

— 27 —

インドが、もしこの上に、戦争を拡大し、継続せしむるならば、その禍は、ひとりインド民族の不幸のみならずして、やがて全世界人類滅亡の導火線となる恐れがあります。軍に勝つたというがことは、インドにとっては、まことにあげて論すべき価値はありません。

私は佛教の一比丘衆として、佛教の根本義たる不殺生戒、すなわち非暴力の教説をもつて、インドに奉仕し、かつは世界に奉仕せんがために、私の生涯をささげます。私の奉仕によって、若き一人の兵士の生命にも代わることができれば、本望であります。

私を靈山の戰場に出して、平和の御祈念を修行をすることを許してください。私は、わが身命を惜しまぬ決定をして、インドにまいりました。日本佛教僧侶の一門の弟子檀那は、中印国境の紛争阻止のために、私に続いて二名、三名、十名、百名と戰場に往いて、非暴力の御祈念に倒れる約束をしております。

〔天鼓〕昭和三十八（一九六三）年一月号十一・十六頁より

—28—

* バブジー マハトマ・ガンディー 爺。 * 奥津城 お墓。 * 中共 中華人民共和国。 * 理非曲直 道徳的に正しいことあやまつたこと。 * ただに 単に。 * 開闢 開はひらく、闢はひらく。 * 檀那 は明らかにし、拡めることで、ひらき、ひろめるの意。 * 一比丘衆 一人の僧侶。 * 靈山 灵山淨土。 * 檀那 佛教信者。 * 中印 中国とインド。

* インド・パキスタン全面核戦争の危機に直面し、恩師山主法話『インドは剣を捨てて不殺生の教えを天下に示せ』を掲げ示すものです。

太鼓を擊つて御題目を唱えることの尊さ困難さ ——皇居前祈念に対する警視庁による追告——

昭和三十七（一九六二）年十一月三日 熊本花園山仏舍利塔

南無妙法蓮華經

太鼓を擊つて御題目を唱ふるといふことが、どんなに尊いことであるかということは、だれも知る人はありません。日本の御坊様でも、ことに日蓮宗の御坊様でも、このことは知る人は少い。知っても実行する人は、またありません。

—29—

今年の春先に、東京の千鳥ヶ淵で無名戦士の慰靈祭を、日蓮宗が執行したんであります。日蓮宗の管長も法主も集まって慰靈祭をしました。先の陸軍大将・畠俊六氏なども出ておりました。慰靈祭のあと、千鳥ヶ淵から宮城前まで太鼓を擊つて行く計画がありました。それで私も参加したのであります。ところが、警視庁がそれを止めたというのであります。その行事を世話しておる大本願人が出てきました、「今日は、太鼓を擊